

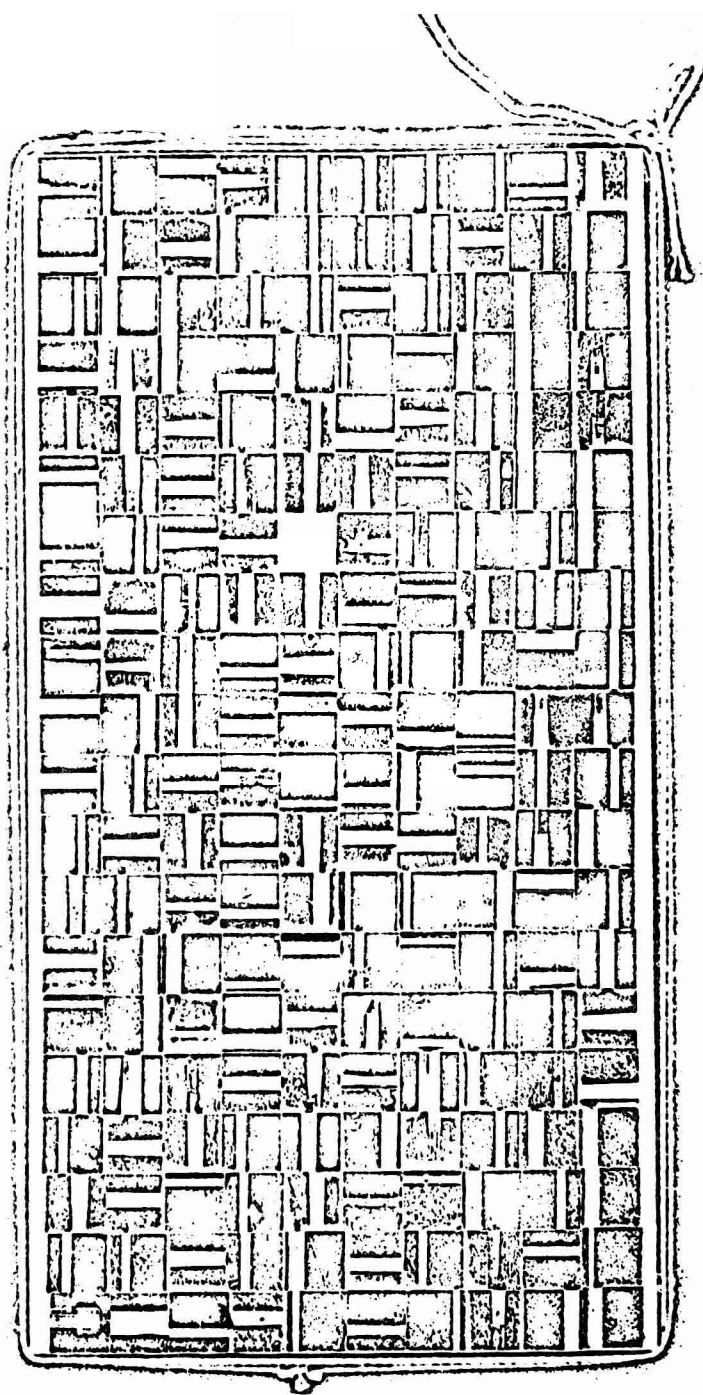
5

鮎川信夫著作集

鮎川信夫著作集 第五卷

文学論 芸術論

発行一九七四年五月一日 著者鮎川信夫 装幀粟津潔 発行者小田久郎 発行所株式会社思潮社
東京都新宿区市谷砂土原町三一―一五 電話東京二六七―八一四一 振替東京八一二二 印刷宝印刷
製本岩佐製本 製函岡本紙器 用紙王子製紙 表紙日本クロス © 1974, Nobuo Ayukawa



目 次

I

『燼灰』のなかから T・E・ヒュームの精神 10

地獄の発見 28

「J・アルフレッド・ブルフロックの恋歌」について 37

ヒッピーは政治ざらいの小児病か 52

ビート派の詩人たち 55

『虐げられた人びと』の記憶 58

ウイリアム・パロウズの『殲滅者』 61

II

犠牲になった世代 70

批評精神について 75

詩人への報告

I モダニズムの遺産 85

II 観念の集团的背景について 89

III 不安定な結論 94

IV 詩の鑑賞について 95

『死の灰詩集』の本質 99

『死の灰詩集』をいかにうけとるか 詩人の社会的態度と現代文明 104

『死の灰詩集』論争の背景 その成立・過程・終結 115

詩劇について 133

なぜ詩壇は“孤島”か 150

文学者の戦争責任 153

翻訳詩の問題 156

詩と政治と表現の自由 パステルナークに関連して 171

戦争責任論の去就 191

精神・言葉・表現 206

世代を超えた表現を 午後三時の対話 1 224

青春の意味

229

戦争と文学者・その他 午後三時の対話

2

234

一九三〇年代の射程 W・H・オーデンを中心に

249

III

戦中「荷風日記」私観

272

白井喬二「富士に立つ影」

282

机竜之助小論

285

大衆文学と私

288

推理小説小論

292

シャーロック・ホームズについて

297

IV

山本健吉著「古典と現代文学」

308

山本健吉著『芭蕉』 312

定本三好達治全詩集 317

『邪宗門』小感 319

篠田一士著『詩的言語』 324

大岡信著『蕩児の家系』 327

ジャン・フランソワ・デラシユス『ル・ジャポン』 330

ヘンリー・ミラー『わが生涯の日々』 333

内村剛介著『流亡と自存』 336

V

『赤い風船』の詩について 340

『汚れなき悪戯』の主題 343

ジェームス・ディーンと映画大衆 348

映画批評における技術と態度 354

「抵抗」をめぐって 361

マス・コミの英雄 367

リチャード・ブルックスとニコラス・レイ 373

「心中天網島」 379

「カラマーゾフの兄弟」 382

「ジョニーは戦場へ行った」 385

解説

泥のなかの眼——鮎川信夫のリアリズム 岡庭昇 390

*

編集ノート 三好豊一郎 399

掲載誌紙一覧 406

『燼灰』のなかから——T・E・ヒュームの精神

1

「ある憂鬱なところ、——生命のない大沙漠のような精神、そして街をゆく行進曲のひびきが波瀾のようにこの沙漠のうえをよこぎり、それを統一するが、それもやがては過ぎ去ってしまう」と、T・E・ヒュームは、その世界観のスケッチである『燼灰』の終りに記している。

『燼灰』の諸断片に示された彼の考え方は、ある一時代の世界観に概念的衣裳をかぶせる論理操作や、始めと終りをむすぶことによつて、いずれはその体系の幕を閉じる哲学的労作とは似ても似つかぬものである。彼にとつては、最初から概念のシステムなど眼中になく、言語病にかかつていない状態、——彼のいう「あたり一面の混沌」のなかから物を見ようとするのである。今でも哲学者はもちろん批評家たちでさえ、驚の眼で世界を鳥瞰しているような態度でものを言っているのに対して、彼は「眼は泥のなかにある」と素気なく言い放っている。

彼にとつて、泥の眼によつて観察された一つの断片は一つの断片にすぎないのであつて、最後の一章は冒頭の一章であつてもなんら差支えないわけである。

ある憂鬱なところによつて、人間の存在のもろさと、不安定な基盤をむき出しにしてみせた『燼灰』を彼に書かせた動機は何であつたろうか。実のところ、この動機をさぐる以外には、今さら彼の古い断片をひっきりかき廻す興味はない。第一次大戦で若くして戦没したヒュームへの共感を語ることが、第二次大戦に生きのこつた彼にとって何らか

の意味を持ち得るとすれば、この動機を説明することにつきるのである。

多くの詩人を、ヒュームのような積極的ベシミストにしたり、彼の遺稿を整理したハーバート・リードのような一種のアナーキストにしてしまう近代に於ける社会的要因は、あらためて述べるまでもなく、十九世紀に出尽してしまっていると言つてもよいかも知れない。しかし十九世紀においては、詩人は文明からの逃避者として現われ、二十世紀にあつては文明の批判者として現われていることに注意しなければならない。イギリスのエリオット、オーデン、スペンダー、フランスにおけるヴァレリー、アラゴン、エマニユエル等、いずれもそうした近代文明の批判者として現われている。

近代詩から現代詩にいたる約百年間における詩人の社会的役割のこのような変化に注目することは、われわれにとって特に重要である。T・E・ヒュームをイギリスにおけるこうした傾向をつくりだした先駆者として認める時、彼の憂鬱なところ、そして彼の泥の眼が、十九世紀的なボードレルの苦悩やランボオの千里眼などからいかに遠く距っているかに気づくはずである。

ヒュームの思想の最も根本的な特質は、ルネサンス以降のヒューマニズムに対する不信の態度にある。彼は『ヒューマニズムと宗教的態度』のなかで、西欧ヒューマニズムの伝統が崩壊しつつあることを告げているが、彼によればルネサンス以降の世界観は、うわべはいかに多様に見えても、底を割ってみれば同じヒューマニズムの原理に帰着するものである。こうしたヒュームの仮定は、いかにも大雑把な印象を与えるかも知れないが、ヒューマニズムに対する外からの批判として、ひとつの真実を含んでいることは見逃せない。いわば、内からの批判によってはどうしても解決し得ないヒューマニズムの矛盾を外から衝くことによって、近代文明批判にひとつの視野を開こうとするものがある。

彼はヒューマニズムというものを大体次のように定義している。それはルネサンスによって中世の原罪観念から解

放され、生れつき善なるものとしての人間性をみとめることにより、多かれ少かれ人格の自由なる発展に希望をつなぐ哲学である。そして中世においては神格のうちにおいてのみ認められていた完全性の概念は、ヒューマニズムによって人格のうちに持ちこまれるにいたった。人間性という元来が相対的で曖昧なるものを尺度として、それらの尺度が果して真に満足すべきものかどうかは、決して疑問とされない考え方に立っている。ヒュームはまずそれらの没批判的なヒューマニズムに疑問の眼を向けるのである。

人間の性善とか、進歩の観念とか、ひとびとを満足させているヒューマニズムの基準は、二十世紀の不安定な世界へ、「死への解体」へ、燼灰のなかへ還元されなければならぬ。彼の仕事は、ヒューマニズムがわれわれにとって必然的なものでなく、単に可能なものにすぎないことを論証することから始められる。

生に対する新しい態度、新しい人間概念としてのヒューマニズムを出現せしめたのは、言うまでもなくルネサンスの文化解放に始まる。そして、このヒューマニズムの原理はその歴史的役割を果たして以来、今日に至るまで人間社会の絶対的な条件と考えられるようになり、それ以前の時代、たとえば中世は、この新しきものの欠除として性格づけられるようになった。ところが、ヒュームによれば、逆に同じような理由によって、ルネサンス以降のヒューマニズムは「原罪の意味を理解し得ないという同一無力を示している」ことになるのである。

中世を暗黒時代と呼ぶことは自由だが、それによって近代から現代にいたる歴史が、暗黒ではないという保証は得られない。一千年にわたって人間の自由を束縛していた中世における高度の位階制度を打破し、さまざまな社会悪を生むに至ったと考えることもできる。

今日の文明が遭遇している異常に困難な事態について、明確な歴史的意識を持っている者には、こうした彼の考え方が、単なる倒錯でないことは明白であろう。トインビーの『試練に立つ文明』に述べられているような原子時代に直面した現代人の苦悶は、近代史がルネサンスによって輝かしい未来を約束された時から内包されていたのである。

なにかといえ、戦争の恐怖、機械の発達、階級の不平等、集団の圧力等が、今日の社会において人間性を圧迫していることを口にするヒューマニストは、そうした現代文明のさまざまな状況が、もとをたせばあらゆる分野にわたって人間能力の乱用を許すヒューマニズムの西欧的伝統に端を発することを知らなければならぬ。科学を発達させ、遂には原子爆弾を作るにいたった人間の能力が、それと同時に倫理を発達させないからと言って、そうした能力そのものに罪があるわけではない。人間が自分自身をみずからの主人と決めた時に、現代の悲劇は準備されたとする神学的ドグマに抗して、はたしてわれわれは何を為すことができるだろうか。みずから創りあげた近代文明の矛盾を解決する能力を持たず、ある種の自然力を待つより仕方のない今日の状況は、人類が自分自身の罪過をどうすることもできずに、手をつかねて眺めている状態のように見える。

ヒュームは近代文明が陥るこうした不安定な状況をかなり正確に直観していたようである。彼の思想の背後には、すくなくともエリオットが『荒地』を書いたのと同じ程度の鋭い歴史的意識が感じられる。歴史というものは個人がある一時代の文化的影響から解放するのに必要であると彼が考えていたことは明らかで、もしかかなり長期にわたる歴史を自由に駆使しうるなら、われわれは偽物の範疇の影響をこうむる危険に對して、一種の種痘をしていることになるというような意見を述べて、「それゆえ、人間は常に平衡棒として一千年の蔵書を携えていなければならぬわけだ」と言っている。

そして、彼はその一千年の蔵書のなかから、ルネサンスに始まるヒューマニズムの伝統からきわだって孤立していた最も偉大な例であるパスカルを見つけたのである。おそらく、パスカルを読まなかったら、彼の近代ヒューマニズム批判は、それほどはつきりした形をなさなかったらうと思われるほど、これは彼の思想にとって重大な契機をなした。彼は自分のノートの後半を、パスカルを読むための序説と見做して差支えないとさえ言っている。

彼が、ヒューマニズムの諸基準がいかに流動的で、不確実な根拠に立っているかを論証するために用いたところ

の、實在の非連続の觀念は、明らかにパスカルの三つの秩序の示唆によるものと言えよう。ヒュームは實在の領域を分類して、(一) 数学的・物理的科学が対象とする無機的世界、(二) 生物学・心理学及び歴史によってとりあつかわれる有機的生命の世界、(三) 倫理的・宗教的価値の世界、にわけて考えた。そして、このうち(一)と(三)は絶対的性格を持つものであり、それに反して(二)の生命の領域は、元來相対的なものであつて、これをとりあつかう科学も生物学とか心理学、歴史学などのように、相対的な性格をもつものであるとした。それから、彼はこれら三つの領域の間には、絶対的な断絶がなければならぬとして、ひとつの領域から他の領域へ導く橋渡しがあつてはならないと考えた。

たとえば(一)と(二)の混淆からは、スペンサーの生物学のように、生命を環境への適応とするような全く機械的な見解に墮してしまふ。また(二)と(三)を連続せしめることから、哲学における觀念論、倫理学における相對論、文学におけるロマンチズム、宗教におけるモダニズム等の混血的概念が生れるわけである。

しかし(一)の領域と(二)の領域の非連続を認めることは比較的容易であつて、ニイチェ、デルタイ、ベルグソンなどによつても、それぞれ甚だしく相違した仕方では認められてゐるところであるが、(二)と(三)の非連続を認めることは、ルネサンス以降のヒューマニズムの全伝統に對決することになり、あらゆる近代主義への反動を意味することになるのである。パスカルが、近代のヒューマニストに對して孤立するのは、この間の非連続の觀念を承認したからに他ならない。「肉体から精神への無限の距りは、精神から愛への一層かぎらない無限の距りを象徵する。なぜなら、愛は超自然的なものだからである」——こうしたパスカルの言葉は、ヒューマニストにとつて我慢のならぬものであらう。ヒューマニストにとつて、愛はあくまでも人間的なものであり、超自然的なものであつてはならないわけである。

『汝の欲するところをなせ』という一文を書いた頃のオルダス・ハックスレイのパスカル觀には、そうしたヒューマ

ニズムの人間観が躍如としており、パスカルを死の讃美者と呼んでしきりに攻撃している。つまり、彼によれば実在の抽象にすぎないパスカルの三つの秩序は、階級制度が宇宙のなかに客観的に存在すると主張するようなものであり、これに反してわれわれが知っている実在はつねにパスカルが区別した三つの要素の複合物としての存在であり、たがいに分離し得ないものである。だからパスカルの仮定には、なにか企みがあるというわけである。愛を故意に超自然的なものとすることによって、われわれを暗黒のなかにつき落とし、人間の悲慘を強調しようとする見えすいた宗教的意図によるものだ、と彼は考えたのである。そしてパスカルの「人間の悲慘」の信条のかわりに「欲望を抑えることは、健康な四肢と鮮麗な毛髪の上に砂をまき、欲望の満足は、そこに生命と美の果実を植える」というブレイクの生の讃歌を掲げることによって、宗教や倫理を、人間の恐怖心からうまれるものとして排撃したのである。

しかし、パスカルが分類した三つの秩序の仮定の当否はしばらくおき、第一次大戦がハックスレイたちの世代に齎した二十年代のヨーロッパ社会の混乱と不安を考えるならば、こうした生の讃美の思想が、決してルネサンス期におけるような健康な息吹きをもっていないことはおのずから明らかであり、実は衰弱したヒューマニズムの観念的産物にすぎないことも明白であろう。こうした時代に、人間の相対性をありのままに認めることは、かえって現代の理性にとつて、絶望の一表現と受けとれぬこともない。その後における彼の思想的発展が、このことをはっきりと証明している。「小鳥が枝から枝へ移るように、精神は些事から些事へ飛びうつる。大切なのは、何事にも自己を固定しないように心がけることである」といったヴァレリイも、流動的な生の支持者であり『ヘパンセ』の一句をめぐって『の中で、パスカルに対してはつきりした嫌悪を示している。彼によれば、この〈父〉を天空のなかに認めない不思議なキリスト教徒は、「追いつめられた獣のごとく自らを感じ、自らを描き、自ら嘆いている。のみならず自分自身を追いつめて、自らのうちにある大なる資源、論理の力、嘆賞すべき言葉の力を駆って、あらゆる眼に入るもの、しかもなんら心を痛めるにはおよばぬものを損わせている』のであって、この徹頭徹尾陰惨な態度のうちには「われわれ